

SciREX共進化実現プログラム（第Ⅱフェーズ） 課題選定等を含めた今後（令和4年度まで）の進め方について（案）

令和2年度

【政策課題の設定】

- ・文科省事務局による、政策ニーズと研究シーズのマッチングの実施（詳細調整中）
- ・提案ごとの政策リエゾンの配置
- ・政策課題の作成（必要に応じ、政策リエゾンによるサポート）

【共進化実現プログラム（第Ⅱフェーズ）プロジェクト選定等委員会の設置】

- ・新たに実施予定のプロジェクトの選定（課題選定）及び実施に係る助言
- ・進行中のプロジェクトのメリハリ（ステージゲート）付けに係る助言 を実施

【課題選定】 本採択（原則2年、年間最大1000万円）FS採択（原則1年、年間最大250万円）を選定

①書類審査（査読及び書面審査会の討議）

- ・ヒアリング対象課題（本採択予定）、及びFS採択予定課題の選定

②ヒアリング審査（行政官・研究者・（政策リエゾン）の説明、及び質疑）

- ・本採択予定課題の選定

③総合的な討論・熟議

- ・本採択課題及びFS採択課題を選定するための助言のとりまとめ

SciREX共進化実現プログラム（第Ⅱフェーズ） 課題選定等を含めた今後（令和4年度まで）の進め方について（案）

令和3年度以降

●採択課題について、年に一回、以下を実施し、適切な進捗管理や成果の創出を目指す。

- ・フォローアップ（文科省事務局、政策リエゾン）
- ・座談会（アドバイザー委員会）
- ・成果報告会（公開）
- ・ステージゲート会議（必要に応じて）

【ステージゲート】

（目的）

- ・メリハリ付けを目的とし、プロジェクトの廃止・発展を視野に入れた審議を行う。

（対象）

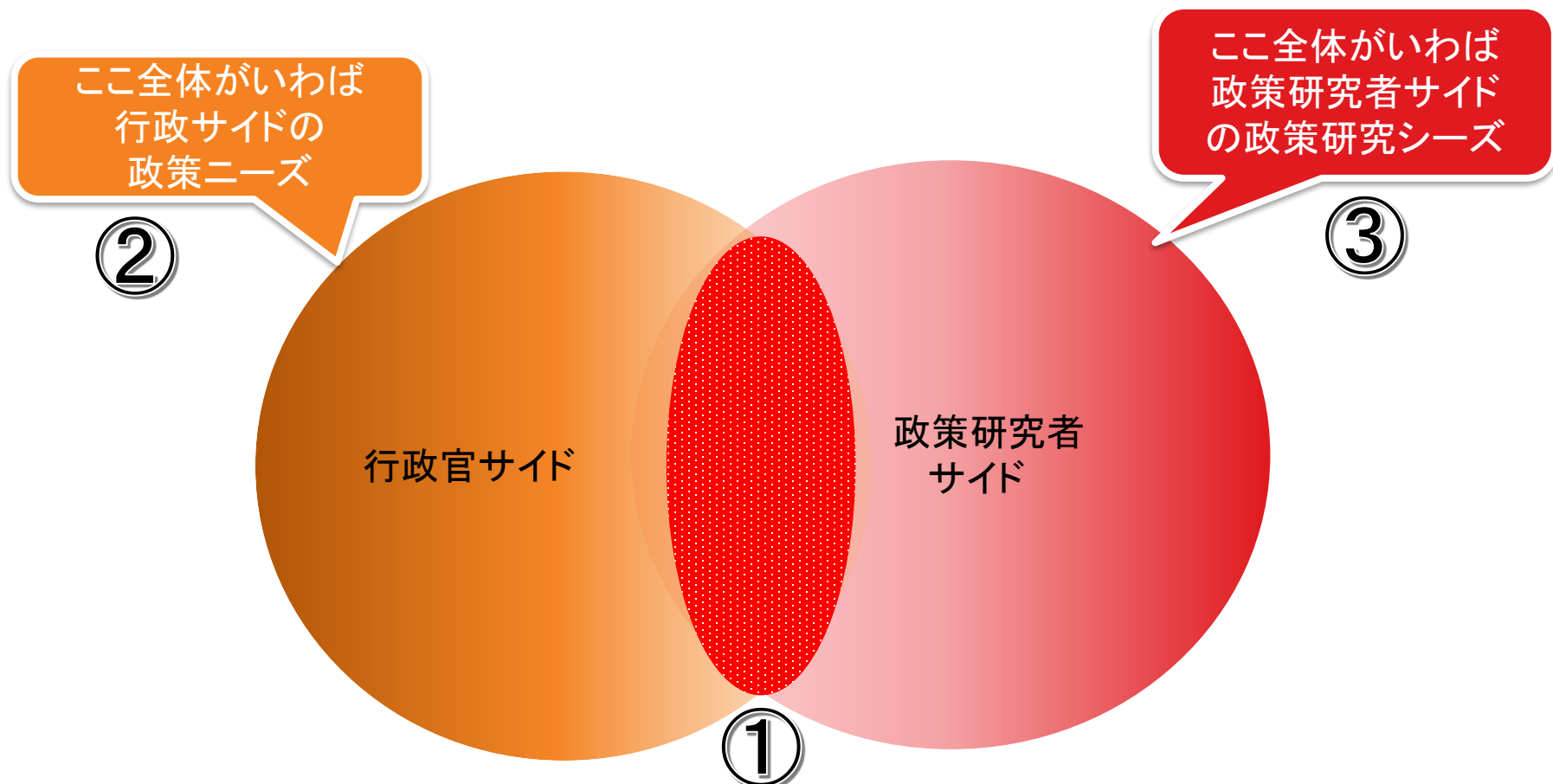
- ・F S採択の課題のうち、本採択が望まれるもの
- ・本採択の課題のうち、翌年度以降も実施予定だが、プロジェクト遂行の合理性が低く、FSへの移行や廃止が望まれるもの

（進め方）

- ・課題等選定委員会による課題選定における、ヒアリング審査と総合的な討論・熟議と併せて実施。

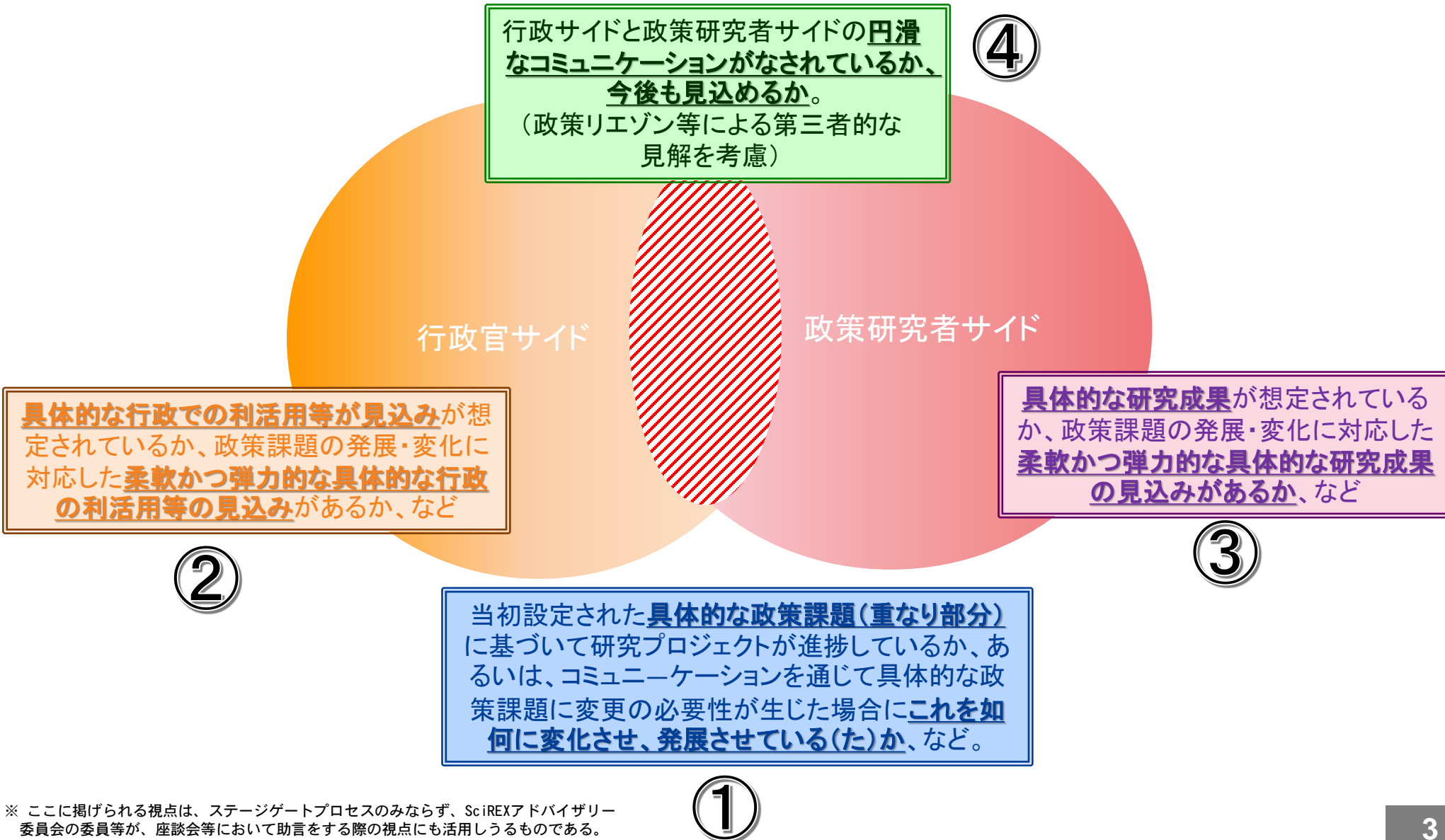
●新たな課題について、毎年度、令和2年度と同様のプロセスにて選定を実施予定。

課題選定の際に主に確認すべき3つの視点（イメージ）

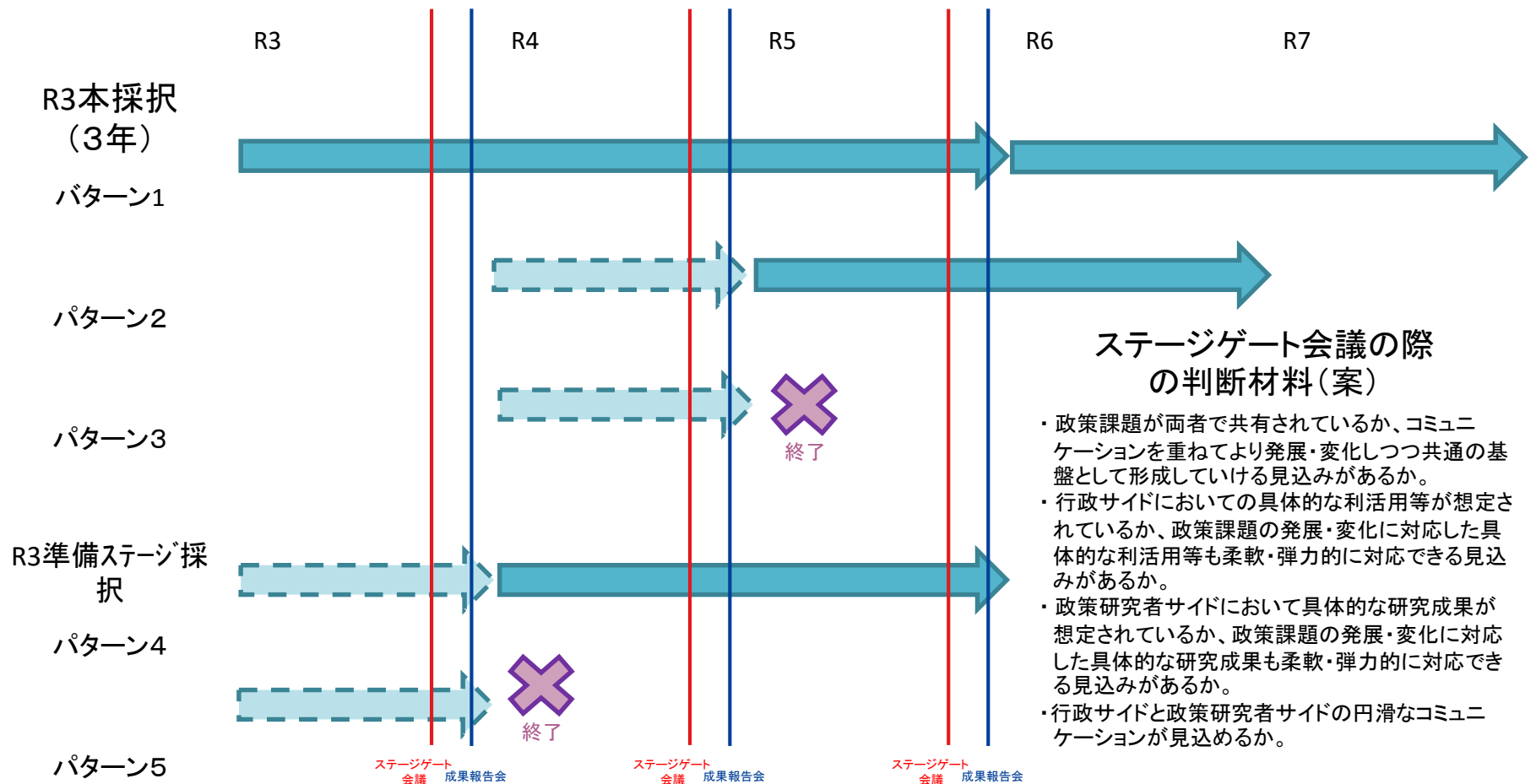


お互いの興味、関心ゴト、問いがマッチし、
それに基づいて**具体的な政策課題(重なり部分)**が設定でき、
行政担当者と政策研究者が協働で作業を進めることが共進化
この重なりの部分を如何に広げ、大きくするか、あるいは
興味や関心ごとの変化等に応じて柔軟に変化、発展させる
ことが出来るかが、共進化において重要

ステージゲートプロセスの際に主に確認すべき4つの視点（案）



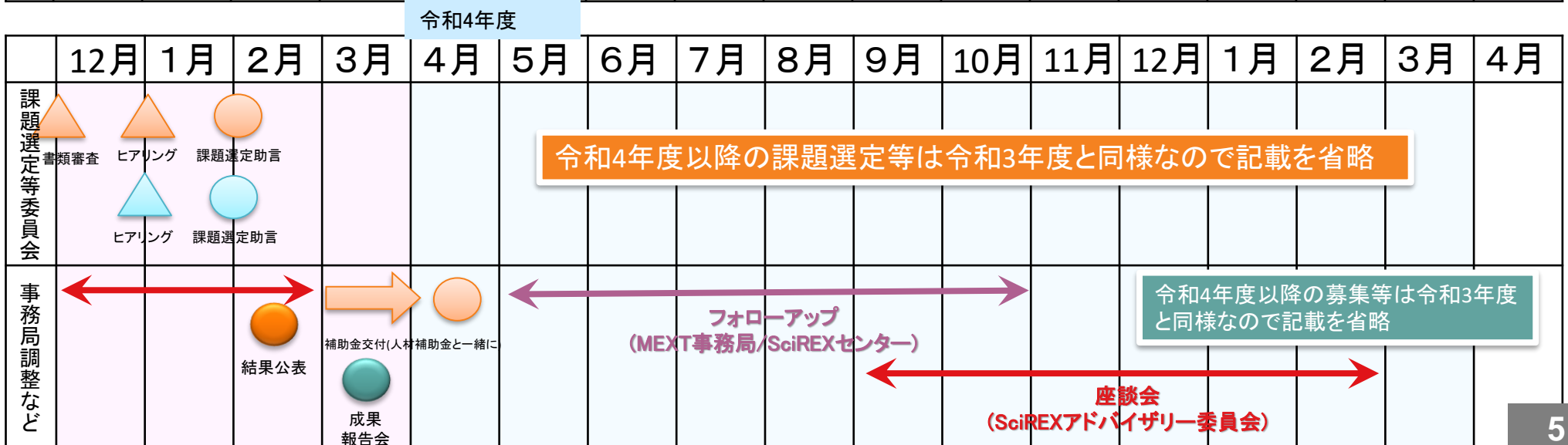
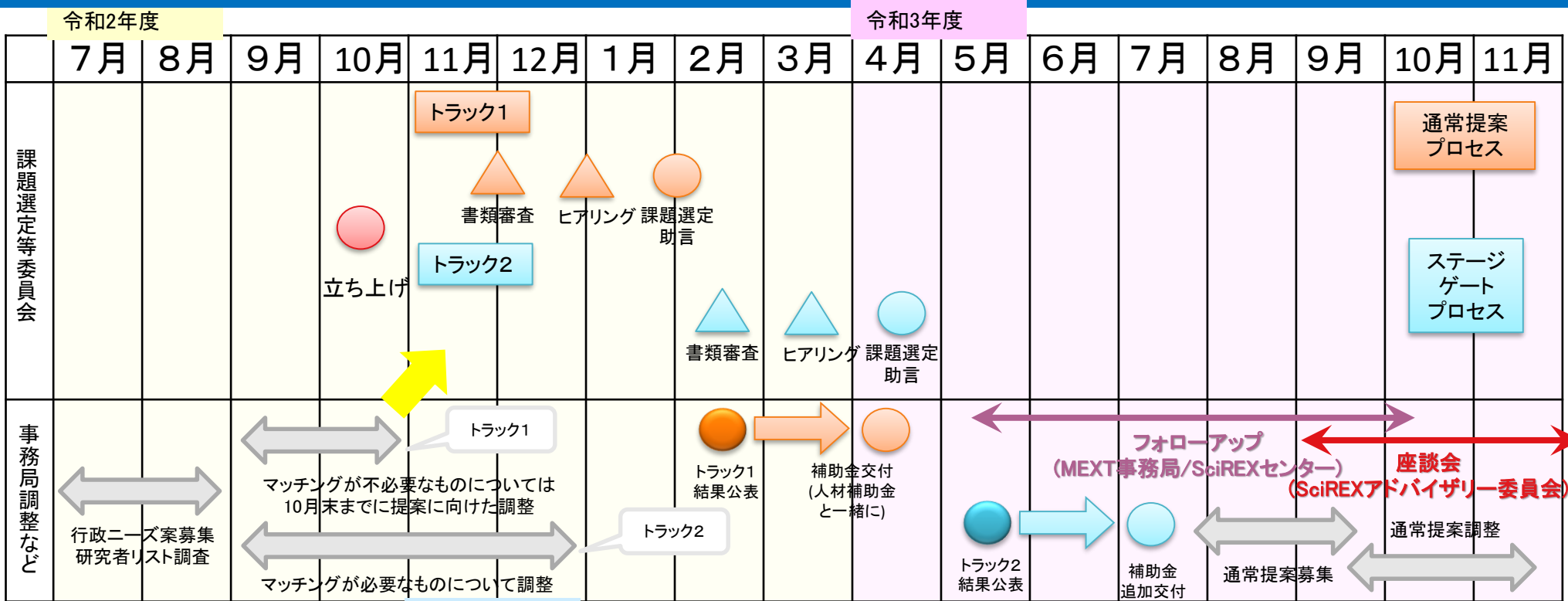
ステージゲート方式によるプロジェクト進行（イメージ）



予算規模: 本採択の場合は、年間最大1千万まで、準備ステージの場合は、年間最大2.5百万円まで

本採択の場合は、年に一回のフォローアップ、座談会(アドバイザー委員会)、成果報告会(公開)、ステージゲート会議(課題選定等委員会、必要に応じて)を実施するとともに、SciREX室、政策リエゾン、SciREXセンターがプロジェクトの進行をサポート
 準備ステージ採択の場合は、年1回の成果報告会(公開)及びステージゲート会議(選定等委員会と同じ)を実施するとともに、基本的に自律的なプロジェクト運営を実施

今後の主な予定（今後変更あり得る）



SciREX共進化実現プログラム（第Ⅱフェーズ）

第Ⅰフェーズとの違い、将来の目指すべき方向性との関係性について（案）

	第一フェーズ (令和元年度～令和2年度)	第Ⅱフェーズ (令和3年度～)	将来(理想的な姿)に向かって
政策課題の 粒度	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 行政の課室単位で処理できる粒度で調整（従来は、政策粒度が大きすぎて、行政が受け止めきれなかったことで共進化がおこりにくかったことへの反省） 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 第Ⅰフェーズを踏襲 ✓ 加えて、課室を超えた連携、教育政策などにもチャレンジ(政策リエゾンと若手中堅チームのコラボを推奨) 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 政策課題に粒度に関わらず、共進化を実効性を確保しつつ、如何にアレンジ、マッチングできるかについて、引き続き要検討。
行政サイドの 関わり	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 行政サイドと政策研究サイドの関係性を明確化したことは従来になく画期的。 ✓ 行政サイドの人事異動により継続が困難になること、行政起点であること(政策研究サイドがつきあっている感じ)、研究3局の政策ニーズに閉じていたことなどの課題あり。 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ Withコロナ、postコロナなどへ積極的に対応。 ✓ 政策リエゾンをメンター的に各プロジェクトに配置することにより人事異動問題の解消に着手 ✓ 研究3局に加え、教育部局、官房部局を巻き込んだ新たなチャレンジを推奨。 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 行政は文科省を超えたオール霞が関の枠組みへ、研究者もSciREX関係者のみならず一般公募を主流にするなど、このコミュニティの持続的発展を可能とする方向性の具体化に向けて、引き続き要検討。
政策研究サイド の関わり	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 行政サイドと政策研究サイドの関係性を明確化したことは従来になく画期的。 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 拠点大学(6大学)に加え、NISTEP、CRDS、RISTEX及びRISTEX公募プログラムにてこれまで政策研究を実施した経験のある政策研究者にもウイングを拡大。 ✓ 政策研究サイドから研究シーズを収集(対等なアレンジに向けた第一歩) 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 同上
プロジェクト マネジメント	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 前例のない取り組みであることからMEXT/SciREX室とGRIPS/SciREXセンターが連携して手探り状態で実施。 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 政策リエゾンを各PJに張り付けて、メンターの役割を果たすとともに、プロジェクトマネジメントの仕事をMEXT/SciREX室から一定程度タスクアウト ✓ GRIPS/SciREXセンターの関与の拡大を模索。 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 持続的かつ安定したプロジェクトマネジメントが可能となる仕組みや方法について、引き続きアジャイルに試行錯誤をしつつ要検討。
プログラム マネジメント	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 前例のない取り組みであることからMEXT/SciREX室とGRIPS/SciREXセンターが連携して手探り状態で実施。令和2年度の行政官、政策研究者の振り返りにより多くの示唆を得る。 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 山下@政策リエゾンが若手・中堅行政官の心得るべきこと、伝えたいこととして個人文書を作成、配布 ✓ 行政経験者やシニアな政策リエゾンをプログラムマネジメントに関与させることを模索。 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 持続的かつ安定したプログラムマネジメントが可能となる仕組みや方法について、引き続きアジャイルに試行錯誤をしつつ要検討。

政策リエゾンの活用と発展

- ✓ SciREX事業においては、政策形成と政策研究の共進化を進めるために、SciREXセンターにおける拠点大学やSciREX関係の研究者が進める研究活動と実際の政策形成・実施の現場をつなぐ役割と担うための行政官に対して「政策リエゾン」をSciREXセンターが任命。（令和2年5月時点で約20名）
- ✓ 科学技術イノベーション政策を担う現役の行政官が、その時点の所属ポストの業務や必要に応じてその範囲を超えた、より大局的・俯瞰的な見地から、SciREX事業に様々な形で参画。具体的には、政策側から研究者への政策ニーズの提示、研究プロジェクトへ行政の観点からアドバイス、SciREX関係機関が主催する研究会やセミナーへの参加等。
- ✓ 令和元年度から開始されたSciREX共進化実現プロジェクト（第Ⅰフェーズ）においては、人事異動があった場合に、本人の意欲があり、かつ引き続き研究プロジェクトに参画を希望する役割を果たし得る行政官が、引き続き、研究プロジェクトへのアドバイスを رفتたり、所属していた部署における政策形成へのつなぎ役を担えるよう「政策リエゾン」を新たに任命することとした。
- ✓ 今般、新たにSciREX共進化実現プログラム（第Ⅱフェーズ）を進めるにあたっては、プログラム全体の運営に関する助言、個々のプロジェクトに関するマネージメントやメンター的な役割を果たすための活動など、政策リエゾンにさらなる役割と活躍の場を提供する予定であり、今後とも、政策形成と政策研究の共進化を自律的かつ持続的に発展させ、文部科学省における行政官のEBPMの推進や客観的なエビデンスに基づく政策形成のためのリテラシー向上にも資する役割を積極的に果たしていけるような取り組みを充実・発展させていく予定。